

## 課題名：6. (2) ソデイカ（赤いか）の資源生態調査

### 事業名：沿岸漁業重要資源調査

予算額：113 千円（単県）

期間：平成 14 年度～

主担当：増殖技術室（太田武行）

### 目的：

近年、本県の夏季～秋季の沿岸漁業を支える重要な資源となっているソデイカについては、その生態学的知見や資源学的知見は非常に少なかったが、H16～18 年度の 3 年間農林水産技術会議の委託研究に採用され、兵庫県、近畿大学、九州大学、水産大学校、日本海区水産研究所との共同研究により、本種の基礎生態に関する情報の収集が行われた。本事業はこれまでに得られた情報と漁期前試験操業によりソデイカの漁況予測情報を発信した。

### 成果の要約：

H22 年のソデイカの不漁は、H21 年前半の低水温の影響により、漁獲の中心である早期来遊群（対馬海峡を 6～7 月に通過する群）が少なかったことが影響した。このため漁期が遅れ（漁期が短く）、サイズも小さかったことにより、漁獲量が昨年に比べ大幅に減少した。

#### i) 試験の内容

##### a) 備船によるソデイカの来遊状況調査

鳥取県漁協賀露本所所属の組合員の漁船を 2 隻備船し、H22 年 8 月 20 日に試験操業を実施した。試験操業は、樽流しで行い、A 船（沖側）は 36 樽、B 船（灘側）は 36 樽を使用した。なお、操業海域は、賀露沖の水深 140～240m、北緯 35° 41.433～35° 45.170、東経 134° 10.131～134° 13.97 であった。

##### b) 漁獲動向調査

漁獲動向把握するため、漁獲月報の集計を行い月別、漁協別の漁獲量ならびに漁獲金額を整理した。また、市場調査（賀露地方卸売市場で実施）を月 3～4 回の頻度で実施し、漁獲されたソデイカの外套膜長を測定した。

##### c) 鳥取県沖の海況からの漁獲量予測

ソデイカの主要な操業水深である水深 180m における 100m 深の水温とソデイカの漁獲量の相関を取り、今漁期の漁獲量の予測を行った。

#### ii) 結果の概要：

##### a) 備船によるソデイカの来遊状況調査

近年、8 月には試験操業で来遊が確認されていたが、H22 年の試験操業では、釣獲はなかった。

また、8、9 月は市場にもソデイカの出荷がほとんどなかったことから、今年度のソデイカの来遊は例年より遅いことが判明した。

##### b) 漁獲動向調査

H22 年の漁獲量・金額は、59 トン、30 百万円で H21 年の 186 トン、79 百万円から大幅に減少した（図 1）。

また、漁獲物組成も昨年同時期に比べると小型であったことから、初期の来遊群の加入が不調だったこと

を漁獲物組成からも確認した（図 2）。

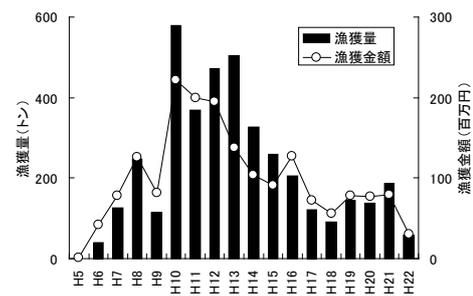


図 1 鳥取県のソデイカの漁獲量と金額の推移

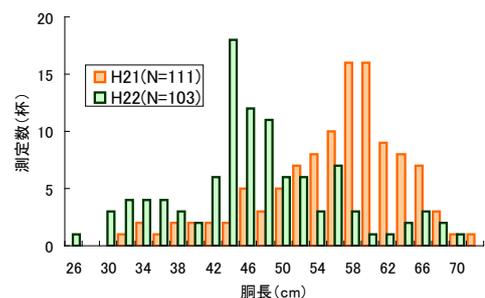


図 2 賀露地方卸売市場における 11 月中旬のソデイカ 胴長組成の比較

##### c) 鳥取県沖の海況からの漁獲量予測

8 月の漁場（水深 180m 付近）のソデイカの遊泳水深である深度 100m の水温を調べてみると図 3 のとおり明確な相関がみられた。H22 年の遊泳水深付近の水温は近年では最も低く、漁獲量が 100 トン以下になるとの予測となった。結果は 59 トンと予測よりも漁獲量は少なかったが、傾向は予測できたものとする。

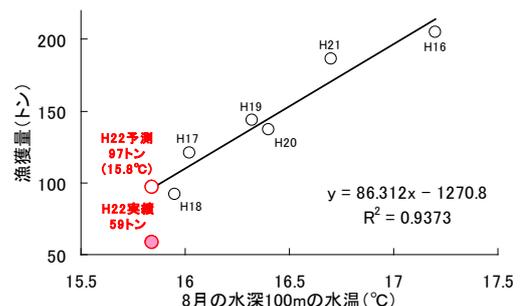


図 3 8 月の鳥取県中部沖水深 180m 付近の深度 100m 水温とソデイカの漁獲量

### 成果の活用：

鳥取県中部地区漁業振興協議会赤いか部会で調査結果を漁業者へ説明した。試験操業の結果と今漁期の水揚げ見込みを「赤いか速報」として沿海漁協へ配布した。赤いかの不漁について山陰中央新報の取材を受け、9 月 2 日付けの記事で掲載された。

### 関連資料・報告書：

該当なし